令和元年度　学位記授与式　式辞

本日、学部を卒業し学士の学位を得た８９０名、大学院博士前期課程及び修士課程及び専門職学位課程を修了し、修士及び教職修士の学位を得た２００名、大学院博士後期課程を修了し、博士の学位を得た４名の皆さん、学位取得おめでとうございます。本日、本学から皆さんを卒業生、修了生として送り出せることを、列席しております理事・副学長、学部長、事務局長および教職員とともに、心よりお祝い申し上げます。

今回、新型コロナウィルス感染症の感染拡大により、本学の学位記授与式を縮小して実施しております。本来であれば、皆さん、皆さんのご家族、そして本学教職員にとっても、門出の式として、盛大に実施すべきところではありますが、事態に鑑みこのような形での実施となりましたことをご理解ください。

今般の新型コロナウィルス感染症の世界的な感染拡大により、社会が不安定になってきています。我が国は、阪神・淡路大震災、東日本大震災や毎年の台風・豪雨被害など、いくつもの大きな自然災害による社会的試練を受けてきました。今、我々が直面している新型コロナウィルス感染症も、大きく括るならば、社会的にはこれらの自然災害と同等なものです。我々は、これまでの災害対応や、新型インフルエンザや SARS の流行で経験を積み、社会的に安定した対応ができるようになってきました。しかしながら、今回の感染症は、新型故にその実態が明確には解らず、不安が募り、インフォデミックと言われる、誤った情報が拡散され間違ったまま人に伝播していく現象が生じ、社会が混乱し、不安定化しています。この社会不安の背景にあるのは、「解らない」という状態です。

「解らない」には、二つの型があります。一つは経験がなく未知である状態。もう一つは原理的には理解できているが、数や量の少なさや発現パターンの複雑さにより、全てを理解することが実質的に無理であるという状態です。後者の場合には演繹的あるいは経験的に行動することで安全や安定を取り戻すことができます。前者の場合は行動を決めることが困難と考えがちですが、我々がこれまでに得た経験から類推することで、ある程度の安全を

確保することができます。つまり、学んだ知識を用いることにより不安を和らげ、社会を安定に保つことができるようになります。

明治の物理学者で随筆家としても知られる寺田寅彦は、軽井沢で浅間山の爆発音を聞き、そのことを「小爆発二件」と題する随筆に記しています。ここで寺田は、『ものをこわがらな過ぎたり、こわがり過ぎたりするのはやさしいが、正当にこわがることはなかなかむつかしいことだと思われた。』と記しています。近年この文の前後を踏まえることなく、この文が使われることがありますが、この文の意味を知るには前後の文が不可欠です。この文の前段には、浅間山から降りてきた学生が全く問題ないといい、それを聞いている駅員がそうではないと言う描写が描かれています。その後には、『その爆発の型にもかなりいろいろな差別があるらしい。しかしそれが新聞に限らず世人の言葉ではみんなただの「爆発」になってしまう。』と記しています。

これらを踏まえると、事態について得た情報をこれまでの知識、経験に基づいて理解あるいは推測し、その本質を見極めることが大切であると寺田は述べているのだと私は理解します。ここで、学びそしてそれによって得られる知識が大切であることは言うまでもありません。

皆さんは、本日、大学を卒業、修了し社会に出ます。これからの活動の中で幾つもの「解らない」事態に遭遇することがあるでしょう。その事態を、時には足らない知識を自ら補いながら分析する力を皆さんは身につけているはずです。「解らない」ことの本質を掴み、解決を図る、そのような人と成り、社会を牽引していただくことを祈念します。

最後に、卒業され、社会へ船出する皆さんに、祝意を込めて、和歌山大学７０周年記念に選んだ言葉「そして　ここから」を餞として贈ります。

令和弐年三月二十五日

第十七代　和歌山大学　学長　伊東千尋